

県と市町村との総合教育懇談会 発言概要

日時 令和6年10月21日（月）15時30分～17時

場所 県庁本館棟3階特別会議室

1 会議事項

議題「学びの「新しい当たり前」を創るため、それぞれの立場で、今何ができるか」

（1）長野県説明

- ・資料1 信州学び円卓会議のメッセージ について説明（県民文化部長参事）
- ・資料2 学び・教育改革に臨む私たちの決意
～日本の学びの「新しい当たり前」を信州から創る～ について説明（知事・教育長）
- ・資料3 新しい当たり前を信州から創るために、県と県教委が取り組みたいこと
について説明（教育長）

（2）意見交換

【宮澤辰野町教育長】

今回の県知事と県教育長とのこのアクションはとても画期的であり、高く評価したい。まだ自分自身もまだ整理がつかない部分はあるが、実はコロナが3年半くらい続いたときに、子どもたちにあれもこれもやってはいけない、買い物もいけない、密になってはいけない、と制約があった。子どもたちは本来密にならなければいけないわけだが、それを見たときにこのまま置いておいたら子どもは精神的にも肉体的にも壊れてしまう、何とかしないといけないという思いがあった。ただ、無理もないがコロナ禍の間はどうにもできず、コロナが明けてみたら、社会の価値観が大きく変わり、保護者の考えも変わっている。これを見たときに学校も変えていかなければいけないと率直に思った。

そして実は、2年前から辰野町では、子どもたちが学校でやりたいことを思いっきりやってやろうという取組を始めている。学習指導要領の制約は非常に重く、きちっとやっていかなければいけないものだが、学校で、あるいは町の教育委員会としてできるものはかなりあるんじゃないかということで、町の校長会でも話をして、とにかく今までのやり方、学校のスタイルにとらわれずに、例えば勉強を机に向かってやるのは嫌だけど、思いっきり体を動かしたいという子がいる、身体を動かすのは苦手だけど、絵を書くのは好きだと、そういう子がいる。じゃあそういう子たちにそれぞれの学校でできることをさせてやろうということで取り組んできた。

でもなかなか先生たちは真面目なので、一度レールを敷いて走り出すとそのレールを途中で組み替えるということはなかなか厳しく時間もかかったが、2年目をやってみて、今年あたりから徐々に各学校でもそういうことをしてもいいんだというように変わってきた。例え

ば、今までは「思いっきり外に出てみましょう」と言うと、先生たちは外へ出ることにやっぱり不安があり、「安全面どうしましょう」、「責任問題どうしましょう」と言うんだけど、そこは教育委員会が全部は無理だけど責任を取ると。教育委員会はとにかく学校を指導ではなく支援をする、例えばどこかへ行くならバス代を教育委員会で出す、何か1日こうしたいという希望があればそれを極力保障していこう、やっていこうというように取り組んでいる。まだスタートしたばかりだが、やはり子どもたちが学校でやりたいこと、それから先生方が思い切ってやりたいことがいろいろと出てきた。1日かけて子どもたちが自由に好きなところへ行って絵を描いてみようとか、辰野町のシンボリックな山があるがそこに登って上から景色を眺めてみるとか、他愛もないことだが自分の郷土を上から眺めるというのは子どもたちにとって非常にインパクトがある。とにかく今まではできなかった、そんなことを考えたこともなかった、こういうこともとにかくやっていこうというようなことで始めている。辰野町の教育委員会は、「明日も行きたくなる学校」を目標として掲げて3～4年目になるが、少しずつこういう成果が出てきているという気がするので、やはりコロナが明けてこれからの学校のあり方というのは本当に弾力的に先生方のアイディアを活かしながらやっていかなければいけないのかなと思っている。

【米沢県教育次長】

今御発言いただいたようなことは、まさに我々が実現していきたいことと一致すると考えているが、県に期待すること等はあるか。

【宮澤辰野町教育長】

まだ十分に整理できていないところもあるが、1つは、先程阿部知事が丁寧にステップを踏んでいかなければいけない、でも待ったなしだと、こういうような発言をされたが、まさにそうだと思う。時間をかけて議論しても、子供たちは1年経ったらもう次の段階にいつしまうので、やり直しはきかない。大人はいくらでも今年できないんなら来年やり直せばいいが、子どもたちにとっては、今年は今年しかないの、やっぱり各学校でも思いっきり今の目の前の子どもたちに、今年これをやらせたいとか、子どもたちがこんなことを考えているならそれを実現させてやりたいという、現場の思いを実現していくというのが必要なんじゃないかなと思う。

辰野町もまだ本当に手探り状態という部分もあるが、ぜひとも知事部局と県教育委員会とがこういうように本気で連携をしていくということは、県内の市町村にとってあるいは市町村教育委員会にとっては、とても心強いことだと思っている。

またまだ検討中ではあるが、先程御説明いただいたウェルビーイング実践校にも、校長会で話していないのでどうなるか未定ではあるが、ぜひ手を挙げてみたいと考えている。

【橋渡安曇野市教育長】

今回のメッセージの中で、他者と協働しながら社会の課題と向き合う、あるいは新しい社会の担い手を一緒に育むというところが、非常に共感したところ。

安曇野市では先日、中学生キャリアフェスティバルというものを開いた。皆さん御承知のように、上伊那で長年実践を積み重ねたもので、当市の市長からも「ぜひ上伊那に行って学んでくれ」と言うことで、私達も何度も行って研修視察をさせていただいた。

安曇野市では、地域の幅広い業界や行政、学校が連携して、770名を超える中学生が一堂に会して、働く大人へ何か憧れを持てるような、あるいは安曇野を心のふるさとに感じてもらえれば嬉しいな、ということを狙って始めた。

今年は初年度だったが、56のブースが開かれ、中学生には「君たちは日頃から探究的な学びをしてるわけだから、この場では先生がここを見てこいとかじゃなくて、自分の興味関心を最大限、まさにとことん追求してみよう」ということを話した。あるブースでは、仕事をしている方が、「自分は様々な場面に出くわしてきたが、その際は自分がわくわくするかどうかの視点で物事を選んできた。君たちもこの仕事がやりたいのかどうか、どっちの道へ進んだらいいか、というときには、自分の“わくわく感”をうんと大事にしてくれ」「夢ってというのは、途中で変わるかもしれないけども、その変わるかもしれない夢をどちらかにするかっていうときに、自分の気持ちがどう昂るかの決め手になるのは、どれだけ経験や勉強を積んできたかが鍵だよ」というような話もあり、子どもたちが何のために勉強するんだということを、大人から直に学べたというところで、非常に大きな成果があったと感じている。

そのような意味で、今回県が示している方向性に私も大変大賛成であり、逆にまた今取り組もうとしていることの背中を押してもらったような気持ちがしていて、これをさらに前進させたいなという気持ちでいる。

【白鳥伊那市長】

今から10年ほど前だが、子どもたちが社会見学はするが、社会の仕組みとか、どんな仕事があるとか、どんな人たちが働いているのか、どんな気持ちで働いているのか、という意味で社会のことを知る機会がないということがあり、伊那市内の子どもたち、当時600人以上の皆さん、中学2年生全員に集まってもらって、市内企業100社ぐらいの皆さん、これは企業や農家、医師やテレビ局等いろいろな皆さんに参加をしてもらって、1日みんなで学んでもらおう、体験してもらおう、ということでスタートした。

最初の年は、校長先生たちが反対をして、なぜかという、どこかへ行ったら困るとか、けんかをするんじゃないとか、そんな話があったが、そんなことは全然心配ないよということでやってみたら、もう本当に素晴らしい子どもたちの体験ができた。これがずっと今も続いている。コロナ禍でも確かに大変だったが、Webでやったりして乗り切った。これはぜひ、違う地域や学校にも広がっていくことを望んでいる。

子どもたちは、例えば自分が中学から高校に行って高校から社会人になる、あるいは大学に行くときに、選択肢の中に地域にどんな会社があるのか、どんな人たちがいるのか、全く知らない状況で都会に出ていったりする。地元に戻ってきても何もないじゃないかと思っていたりもする。中学までは一生懸命、私たちは伝えるんだけど、高校でそれが切れてしまったり、また大学生になってもこちらに帰ってくるにしてもこちらの情報が伝わっていなかったりということがある。これは長野県を挙げての課題の1つかなと思っている。

キャリアフェスについては、各企業の皆さんもすごい燃える。ブースによっては人が来ないブースや少ないところもあったりするが、大賑わいのところもあって、どういうふうにしたら子どもたちにこのブースに来てもらえるのか、私たちの思いをどうやって伝えられるのかということで、毎年のように企業の皆さんはかなり努力をしてくる。奇をてらったようなことはせず、真面目に伝わるようなことというのをやっている。

キャリアフェス以外のことだが、さっきの教育長さんたちの話は私も全く同感で、地域を作るにはいろんな企業なども様々必要だが、やはり一番基本は教育だと思っている。教育が継続してきちんとしているということが、その地域をつくっていくことになるので、ぜひ教育についてはしっかりとやっていきたいと考えている。

伊那の高遠町には藩校の進徳館というのがあり、この進徳館から教育や政治や音楽等、様々な分野で550人ぐらいの皆さんが、短い間に学んで出て行って日本を変えている。世界を変えている人もいる。そこではやっぱり実学で、ただ暗記するだけではなく、それを社会にどう還元していくのか、社会の中で自分はどういう立場で生きていくのかということを、しっかりと教えていった。

数年前、長野県さんと一緒にフィンランドに森林林業の関係で現地視察に行ったとき、教育現場に行ったら全く同じことをやっていた。子どもたちは、小さいうちから森に親しんで、森の中でいろんな学びや経験をして、授業では、宿題もないし塾もない。にも関わらず、世界最高峰の教育と評価されている。これはなぜかと思って見ていたが、やはり国の指導要領もあるだろうが、1つの教室の中で分からない授業があると、例えば掛け算の九々あるいは分数だとか、分からないところがあると、分からない子は教室から1回出て、徹底的に理解するまで教え、それから戻ってくる。国語もそうだし社会もそうだし、いろいろなところで理解するまで勉強をして戻って、そして次のステップへ行くっていうことを繰り返すので、分からないまま次のカリキュラムが入るということがない。

そういうことも伊那でも当然できるはずだし、自然もたくさんあるし、そうしたことを教育の現場でやっていくべきだなということを今つくづく思っているところ。

子どもたちは、雨でも雪でも外で遊んでいて、本当にたくましい。伊那市でも、フィンランドに学んだり、また高遠の進徳館に学んだり、といったことをしっかりと紐解いてこれからもやっていきたいと思っている。

【武田県教育長】

今の話にあった「実学」について、学校の授業はどうしても教室で教科書を見て頭だけでやっているような授業が多いが、やはり子どもって体全体で学んでいくんだということをもう一度認識して、基本に戻らなければいけないと思う。

【阿部知事】

今のお話は私も非常に重要だと思う。特に学校と地域との繋がりところが、どうしても学校の先生方はやらなければいけないことが多すぎて、地域に目が向きづらい環境になってしまっているのではと思っている。この間、須坂市のコトコトという場所に行って高校生たちと話をしてきたが、やはり生徒たちは地域と繋がりがっている。ただもう一方で、産業界の皆さんも今人手が足りない、人材確保したいという思いがある中で、やはり学校と経済界、学校と地域の垣根をもっと低くしていくことが、地域にとってもプラスになるし、子どもたちにとっても非常に有益になると思っている。ぜひこうしたところも、小・中・高、それぞれのレベルでしっかり考えていっていただけるとありがたいと思う。

もう一点のフィンランドの話は、長野県では信州やまほいくを進めていて、自然豊かな長野県で子育てしたいということで移住される方も、おかげさまでだいぶ多くなっている。そういう方たちと話をすることで、時折不満として出されるのが、「保育園・幼稚園のレベルは良かったけれど、小学校に入った途端に普通の学校になってしまいますよね」ということ。やまほいくだと園舎もないような保育園もあるので、まさに雨が降ったり雪が降ったりしても外で活動して、そういう中で非認知能力が養われたり他者と協働する重要性であったり、あるいは自ら失敗を重ねることによっていろんなリスクを自分で感じ取る力を育んだりとか、そういう意味でそうした教育が望ましいと考える方は、一定程度長野県にいらっしゃるが、そういう方たちからすると、今の既存の義務教育学校はどうしても固定的になりすぎているのではないかという問題意識が、非常に強いのではないかと思う。そういう部分もぜひ各市町村とか各学校で、これからの学びのあり方をどうするかというところにおいて参考にさせていただきながら、取組を進めていただければありがたいなと思っている。

【塩澤立科町教育長】

ちょっと感度が違ったら御指摘をいただければと思うが、私どもの町では数年前から探究学習を進めている。最初はなかなか先生の抵抗も強く、学習指導要領の関係もあり、ちゃんとそれが履修できるのかというような心配もあったが、今はだんだん浸透し始めてきたという状況。そんな折、この決意表明があった。

これからの豊かで希望の持てる社会を形成するためには、無限の可能性を秘めた次代を担う子どもたちを、関係する皆さん方で連携しながら育成していく。これは本当に大事なことでと思っているし、そのためにも子どもたち1人ひとりが持つ能力が発揮できる、そういっ

た子どもたちを学びの主人公として教育のあり方を創造しようとする、こういったことには私も大いに期待をしている。

それによって、最終的に子どもたちが、自ら学び行動し、想像力や個性を活かして、また規範意識を持って、この社会に貢献できる人に育ってもらえれば嬉しいなということも思い、またそれを期待している。それがこれからの持続可能な社会の形成にも繋がっていくのかなという風に思っている。

ただ、アンケートの中にもあったように、課題はある。やはりマンパワーと、それから財政的な面かなということだが、知事の方から、財政的なところは考えなきゃいけないという力強い御発言があったので期待をしているが、やはりマンパワーがないと子どもは育成できないと思う。人を育てるのはやはり人だと思っており、そこも大事なところかなと思っているので、まずそういった点で、ぜひまた県の方でも、応援をしていただければありがたい。

【武田県教育長】

人の配置を含めたことについて、今までは主幹指導主事と校長でやっているという側面が強かったが、もう少し市町村教育委員会とその辺について協議をしていくということは、やっていきたい。

ただ、国の加配は何にでも使えるわけではないところがある。その辺については、今後市町村教育委員会と県教育委員会が協議をしていくときの必要なポイントかなと思っている。

【阿部知事】

まさに予算に関係するので私からも。こういう必要な予算をしっかりと付けていくというのは私の役割と責任だと先程申し上げた。ただその一方で、このアンケートにも出ている、教員に事務作業がたくさんあって負担に感じているという事態は、これはやはり現場レベルで変えていただかないといけない部分もあるし、現場だけで変えられない部分があるのであればそれは一体何なのかと、国の通知が多すぎるのか県の教育委員会の指導が多すぎるのか、そういうところをやはり明らかにして一緒に見直していく必要があるのかなという風に思う。あと、先程教育長のお話の中にもあったように、学校の先生の役割というのは、これから不変ではないんだと思う。どういう役割を学校の先生が果たしていくのかということも、学校や、教育のありようを考える教育委員会でぜひ考えていっていただきたいと思う。その反面、本来義務教育のところは、国がちゃんと措置すべきものだと思うので、県としてもしっかりと県教育委員会と相談しながら、できるだけ充実させていきたいと思うが、国に対しての問題提起は、先程申し上げたように政治活動がかなり厳格に制約されている学校の先生方に代わり、私たちが言っていないといけないのかなと思う。そういう意味で、この教員の配置のところも、先程少し申し上げたように、それぞれのお立場で考えていただくことがまだまだあるんじゃないかなと思っているので、それをぜひそれぞれ考えていただいた上

で、また一緒に私からもっと特に強く働きかけますとか、あるいは当面は県単でもしっかり頑張って予算にしましょうとか、そういう前向きな話し合いをできるようにしていきたい。

【曽根原県教育次長】

今日は学校現場だけでなく首長の皆さんとか教育長の皆さんもいるので、私なりに今思っていることを話させていただくと、新しい当たり前を作るとときの「新しい当たり前」とは、多分学校の先生方の6～8割がいいねって言わないような新しいものをイメージしている。例えば私は、新しい取組をしている学校現場の様子が比較的分かるので、こんなことやれたらいいなと思っても、学校の先生方の中には「ちょっとそれはできない」というような声はある。ただそこを飛び越えてもらうことが必要で、そのために今回知事と教育長がトップからメッセージを出したということは、とても意義があることだと思っている。

その中で、そうは言っても、それぞれチャレンジしている先生は、実はいる。例えば宿題をなくすとか、自由進度学習で子どもたちがどこで学んでもいいというような授業をやるとか、新しいことをすると、保護者から「おかしい」と言われたり、地域の人々の理解がないので進まないということがある。

なので、今回県の教育長と知事がメッセージ出したことを受けて、我々学校現場もやっていくけれども、ぜひそれぞれの首長さんや教育長が「こんなふうになるんだよ」ということを、地域や保護者の方に向けてメッセージを重ねていただきたい。そうしないと、頑張った教員が、近い方々からの声で潰されてしまうという状況があるということを私も耳にしたので、ぜひ全員がいいねって思うことではないことでも、思い切って飛び込んでチャレンジしていけば、それが新しい当たり前になると思うので、そういうものがつくれるような風土作りを後押ししてもらいたい。

校長もやらなければならないと思うので、校長がやるべきことは私たちも発信していくけれども、ぜひ周りからもそういうメッセージを出していただくことが、現場が勇気づけられる一歩だと思うので、お願いしたいなという気持ちがある。

【花岡東御市長】

新しい当たり前を作るということは、古い当たり前って何かという共通認識があって成り立っていると思うが、それは何か。

スピノザが教育について語ったときに、「母親が大人の言うことを聞くのがいい子でいい教育を施していい職業に就くことがしあわせだと思ってる限り、子どものしあわせは来ない」と、ここでの母親の考え方を変えなきゃ駄目だっていう風に、350年前に言っているわけだが、今の大学生を見ていてどうにも元気がないように思う。東御清翔高校が昨日100周年を迎えたが、95年前の校長が「師弟同行、労作教育、安心立命」という3つの学校の教えを言っている。生徒と先生が共に学んだと、座学だけでは駄目で一緒に労働しながら成長していくんだ、それから安心立命ということで生徒の1人ひとりに居場所がある教

育を目指していくんだ、ということを言っているわけだが、私はこれはまともなことだと思った。だから不易流行というか、礎になるものを変えるのではなくて、何を変えなきゃいけないのかというところが大事。やはり今はまず親の考え方から変わっていかないと、ますます元気のない子どもが大人になっていくと思う。それを今崩しつつあるのかなという気はしているが、親の考え方に対して、誰かがどこかでものを言う必要を感じている。

【阿部知事】

非常に重要なポイントだと私も思う。先程申し上げたように、この学び円卓会議も私たちの共同宣言も、何が新しい当たり前なのかというのは、決めつけていない。ただ、とはいえ、今の当たり前が何で新しい当たり前なのかなのかという一定程度のコンセンサスがないと、みんなで一緒にやっていこうという形にはならないんだと思うので、これは丁寧なプロセスを踏まなければいけないと申し上げている。この辺が、まさに今日の主たる目的だと思うが、やはりそれぞれのお立場から感じている今の課題、今まではこうだったけどこれはこうしていかなければいけないんじゃないかということを持ち寄って、トータルとしてこの部分は新しい当たり前にしていこうね、という大きなコンセンサスは、細かいところはやはり学校・市町村単位で考えていただくということだと思うが、大きな方向感覚は共有していくことが必要だと思うし、市長おっしゃっていただいたように、私も先程申し上げたが、場合によっては市長や私が、悪者にならなければいけないのではないかと考えている。

色々な価値観がある中で、先程曽根原次長からお話があったように、学校の先生たちが頑張っただけで変えようとしても、いろんな壁があったり保護者からの抵抗があったりして、変えようと思ってもなかなか変えられないという現実もあると思うし、そういうことが積み重なって半ばもう諦めムードになっているということもあると思う。今回の決意表明の中で「多くの関係者と方向性を共有することが重要」と書かせていただいているが、これは知事だけでも絶対できないことで、学校現場の先生方が「やっぱりそうだよね」と思ってくれなければならない。その反面、学校の先生が1人で、あるいは校長先生が1人で頑張っても実際には実行できないと思うので、まさに関係者が協力し合って伝えていかなければいけないのが、この教育という分野であると思う。そういう意味では、市長から御提案いただいたような問題意識のもとで、こうだと思う大きな方向感、今の教育はもっと分権型のシステムにして、教育の中身というよりは私の立場で申し上げれば、教育のシステムは上意下達、文科省が決めたこと、国会で議論になってこれを変える、あるいは変えろと文科省が一生懸命通知を出してくることに従うのが学校教育の本来の姿ではなくて、むしろ子どもたちを起点にして今学校で何をやるべきかということを経験の先生方が考えて、それをサポートするような仕組みに変えることが必要だというのが、私の問題意識の基本。ここも多分色々な御意見があると思うし、またこれは私が知事の立場としてそう感じている部分で、教育長の皆さんや学校の先生方はまたちょっと違う見方をされてる部分もあるかもしれないので、そういうものを持ち合いながら、大きな方向感はずいぶん合わせていきたいと思う。花岡市長とはぜ

ひ一緒に、親の考え方を変えなければいけないというところは一緒に変えていきたいと思うので、よろしくお願いしたい。

【武田県教育長】

冒頭、辰野町教育長がおっしゃったことだが、先生たちが「そんなことやっていいんですか」という風に思っているそのことが問題。つまり、現場の先生たちが自由じゃないということ。その自由を奪っているものは何なのかということ、やはりきちんと問うていかなきゃいけないだろうし、そんなことやっていいんですかっていうことは、子どもからは考えていないということである。大人側のルールとか制約から考えてしまっているの、それを本当に子ども側から教育とか学校について考えられるようにするにはどうしたらいいか、というのがやはりすごく大きなテーマだと思う。

【宮澤辰野町教育長】

私も先生方に「学校は何のためにあるんですか」ということをよく質問する。先程武田教育長も学校が何のためにあるのかっていう話をされたんだけど、文科省も最近は学校だけが学びの場ではないとか、いろいろな学びがあるとか言っているし、それは確かにそうだと思う。でも長野県を見た場合には、全ての自治体に学校があるわけで、長野県の中でもフリースクールとかいろんな学びが学校以外でも地域にいっぱい出てきている。でも小さな自治体は、学校しかないっていう場所もある。そうすると、学校ってどういう存在なのか、学校が存在する意味って何なのかっていう、そこにもう一度我々は立ち返ってみて、その土台のところをきちっとやる必要があると思う。

学校を回っている中で、先生たちに学校の存在意義は何だと問われたときに答えられますか？と意地悪く質問をするが、学校なんかなくてもよいという保護者も増えてきていて、それはそれとしてそういう主義主張もあるんだろうが、でも我々は、だから学校って必要なんだよという、ここをしっかりと盛り上げていかなければいけない気がしている。この部分はぜひ県の教育委員会の方も考えていただいて、町も考えるが、何のために、時代が変わっても学校はこうなんだっていうのは、やっぱり持ちたいと。

【羽田長和町長】

長野県は58町村あって、小規模の学校が相当多い。例えば私どもの場合も、小学校2つと、中学は上田市との組合立の学校でたった3つしか学校がないので、私なんかも運動会・卒業式・入学式、全部ほとんど出る。多分大きな市なんかは、市長さんが入学式から卒業式から運動会から全部出るなんてことは不可能だと思うが、したがって、学校の先生や教育委員会と私どもは、すごく関係が近い。

なので、比較的今いろいろな議論があって、先生方にいろいろな問題もあるかもしれないが、結構校長先生の判断で先生方がしっかりと教育について対応していただいているという風

にも思っているのですが、そういった点では、やはり大きな市と小さな町村との学校や教育委員会との関係は少し違うんじゃないかなと。そこら辺はやはり、県の方でも小規模の学校についての考え方と大きな学校の考え方は、別にしていただけないかなと思う。

それから、これは学校と直接関係ないが、私どもの町に黒曜石の遺跡があって、イギリスには火打石の遺跡がある地域がある。これが子どもの交流に繋がって、大体2年に1度こちらから行く、向こうからも2年に1度来る。そこでいろんなことを学び合ったり、子どもの付き合いをする。これはあまり学校とは関係ないが、そういった活動が子どもたちにもものすごく自信を持たせる。

大体1回に8人位高校生が行くが、大体1人7万円ぐらいの負担で10日位行く。足りない分は町で出したり寄付をしていただいたりしてやっているが、こういうことを積み重ねることによって、子どもたちにとってもものすごく自信になる。

1年間英語でいろんな説明をしたりそういうような活動をしているが、そういった活動に対しての支援みたいなこともまた考えていただければありがたい。

【丸山長野市教育長】

長野市においても、子どもの意見等を聞きながら、すべての子どもたちが安心して過ごせる環境づくりとか、その子どもたちの探究心、豊かな創造性を育む体験や学びの機会の創出等に今取り組んでいるところだが、一義的には今まで議論されてきたようにこれは学校現場でっていうのがあるかと思うが、特に学校を変えるっていうことについては、先生方の意識や学校を変えるっていうのは相当なパワーが要るし、時間もかかるものと認識。

学校外での取組について紹介させていただきたいと思うが、具体的には今増加傾向にある不登校の子どもたちについて、自分らしく安心して過ごせる場所として、4月に教育センターSaSaLANDというのをつくった。8月末現在、149名の児童生徒が登録しており、多い日には1日40名の子どもがおいでになって、思い思いに過ごし、工作読書スポーツそれからメタバースそういった活動に親しんでいる。印象的な子どもの姿としては、これまで約2年近く学校に行っていないと、そういった子どもが周囲の人との関わりを自ら求める姿が見られている。このSaSaLANDで見せる子どもたちの姿の中にも、これから学びの新しい当たり前に何か繋がるものがあるんじゃないかなと思っている。

また子どもたちの探究心や豊かな創造性を育む体験、学びの機会として、市の教育委員会では昨年度から、長野スーパーサイエンスプロジェクトというのをやっている。これは信州大学とか民間企業と連携し、子どもたちがとことん好きなことに没頭できる機会、理科や科学を好きにしてもらって、将来社会でイノベーションを起こせるような人材の種をまきたいということで始めている。

また市長部局においては、子どもたちの体験・学びの充実に向けた支援として、昨年度より「みらいハッ！ケンプロジェクト」を実施しており、本年度については市内居住全ての小

中学生約2万7000人に対して、1人当たり3万円の電子ポイントを配布して多様な体験学びの機会を応援している。

いずれにしても、こういった好きなことや得意なことに主体的にチャレンジしているときの、このしあわせそうな子どもの姿こそが、未来に繋いでいく学びの姿ではないかと考えているところ。そのような子どもたちを実際に先生方が見て、先生方も学校も今少しずつ変わりつつあるんじゃないかなと思っているが、市教育委員会としても、この学びの新しい当たり前の実現に向けて、今後また学校とともに県教育委員会の皆さんとともに取組を進めて参りたいと思っている。

【武田県教育長】

本当にいろんなお話を聞かせていただいて、いくつかヒントもいただいたし、もう一度考えてみることもたくさんあった。またいろんなところで力を貸していただいて、ともに長野県の子どもや長野県の教育のために尽くしてまいりたいと思う。引き続きよろしくお願いしたい。

【阿部知事】

とにかく学びの改革とか教育改革っていうと、誰かがどこかで何かを決めてそれをこれやって、と言っていた。今までの教育はみんなそうで、文科省が何か審議会でこれが課題だとか言って決めて通知出して、みんながそれに従って取り組むということを、多分これまでずっとやってきていて、そういうアプローチでは成功しないっていうことが半ば証明されてるんじゃないかと私は思っている。

そういう意味で、今回の私たちの取組は、そもそもアプローチが変わるんだ、変えるんだと。どこかで誰かが何かを決めてそれをみんなに徹底するという形じゃなくて、やはりそれぞれの皆さんがそれぞれの立場で、これは保護者の人たちも含めてだが、やはり変えていく主体になっていただきたいという風に思っている。そういう意味で、非常に難しいことだが、ぜひこれは丁寧に進めていくと同時にスピード感を持ってやりたい。まずはやはり学校現場の先生方が、「武田教育長と知事が何かやってるみたいだぞ」という感じで遠巻きに見ているだけだと多分動いていけないので、また私たちからもできるだけ学校の先生に対してもメッセージを出せるようにしていきたい。色々なタイミングでメッセージを出すようにしていきたいと思うが、ぜひ市町村長の皆さんや市町村教育委員会の皆さんにも、県の取組を冷ややかに見るのではなくて、学校現場も一緒に変えていこうぜと。これは何よりも子どもたちのためでもあるし、学校の先生方がやろうと思ってやれないことをみんなで一緒にやるプロジェクトだという思いをぜひ共有していただけるとありがたいなと思っている。ぜひ今日集まりいただいた皆様方には、しっかり御協力いただければありがたいと思う。